

トゥラガ・ネイション（その2）：伝統と近代の相克

吉岡政徳

（放送大学兵庫学習センター客員教授）

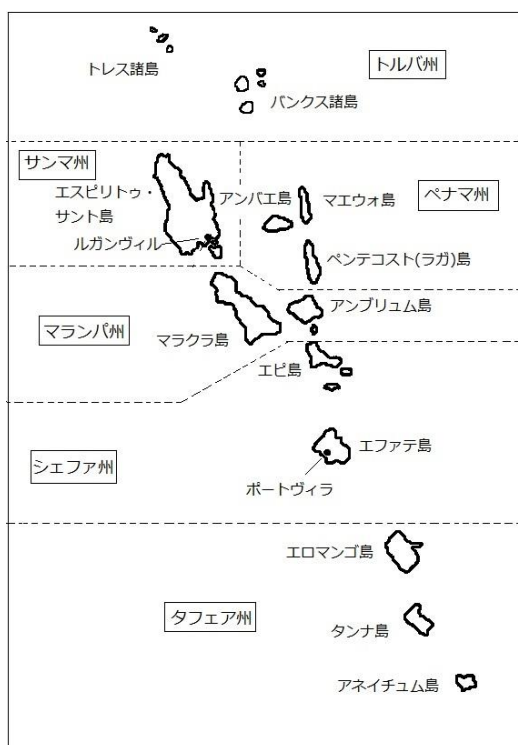
はじめに

「トゥラガ・ネイション（その1）」では、トゥラガ・ネイション運動の本拠地があるヴァヌアツのペンテコスト島北部（北部ラガ）の社会文化的概況、トゥラガ・ネイションで作り出された独自の文字アヴォイウリ、既存の全国チーフ評議会を批判して展開された先住民議会運動⁽¹⁾、伝統経済の自立のための「豚の銀行」、そして2019年現在の本拠地、ラヴァトマンゲム村の状況について論じてきた。本稿では、その続編として、ヴァヌアツ政府が行った「2007年伝統経済の年」宣言、トゥラガ・ネイションのリーダーであるヴィラレオ氏（以下人名の場合は氏を省略する）によるトゥヴァツ紙幣の写真リリース、ヴィラレオの逮捕、ヴィラレオに対する人々の評価、そして、運動のもう一人のリーダーであるヒルダー・リニの思想を取り上げる。取り上げられる人々は、おしなべて「名もなき人々」とは区別されるエリートである（吉岡 2005:172）。そして、彼らの言説で重要な役割を演じるキー概念が、カスタム(kastom)なのである。

人類学の世界では、1980年代から90年代にかけて、カスタム論と呼ばれる議論が活発に展開された。議論の中心はメラネシアで、メラネシアにおいて話されているピジン語で伝統や慣習を意味するカスタムという概念を巡って展開されたこの議論は、ちょうど、ポスト・コロニアリズムの人類学での隆盛と相まって、一つのエポックを築いた感があった。筆者は2000年、それらを総括する意味で自らのカスタム論を展開したが（吉岡 2000）、その中で、特に90年代のカスタム論をリードしてきたリンドストロームやホワイトの議論を批判してきた（Lindstrom and White 1994,1997、White 1993, 1997 など）。

その主なものは、彼らが議論したのは政治的エリートたちの言説であったが、これらエリートたちの発した英語表現の *custom* や *culture* という言葉を分析して、彼らが伝統を表すピジン語概念や現地語概念にも適用できるかのような議論をした点であった。筆者は、メラネシアを生きる大多数の「名もなき人々」にはカスタムとスタイルの二分法が現存しており、まさにバイカルチュラルな世界が出現していることを指摘し、現地語の伝統概念が流通する村落生活を政治エリートたちの言説から区別して説明する必要性を強調した⁽²⁾。そして、これでカスタム論に一応の区切りを打とうとした（吉岡 2001）。しかし、石森はそれを批判し、2010年代になってもカスタム論は継続して登場していること⁽³⁾、筆者が「打ち切る」ためには、議論されていない側面があることなどを指摘した。その一つが、「島嶼社会の国家的なエリートの視点をこ

れまでとは違った形で相対化し、彼らの視点からカスタム論を展開すること」の可能性だった（石森 2016:151）。本論では、この石森の指摘を受けて、エリート視点に焦点を合わせたカスタムについての議論をしようと思う⁽⁴⁾。



地図1 ヴァヌアツ共和国

1 「伝統経済の年」宣言

2004年から2008年にかけて第11代首相となったハム・リニは、ある意味で画期的な政策を展開した。それは、伝統経済(kastom ekonomi)を重視しようという政策だった。2006年の5月には、閣僚会議で「2007年を伝統経済の年に」という宣言をすることが決定されたが、それを受けて、2006年11月18日には、首都のポートヴィラで、宣言に向けての数百人規模のパレードが行われた。このときの様子をヴァヌアツ文化センターの名誉キュレーターであるカーク・ハフマンが詳細に報告しているので、以下ではその報告から抜き出して、パレードの様子を記述しよう。

このパレードに参加した人の半数は伝統的な衣装に身を包み、人々は、ヤムイモ、タロイモ、バナナ、赤く染めたマット（伝統的財の一つ）など伝統的な食材や富を示すものをもっていた。これら大勢の人々の先頭には、全国チーフ評議会の議長夫妻、首相夫妻、大統領夫妻らも加わり、先頭を行くトラックには首相の出身地であるペンテコスト島北部（北部ラガ地方）の太鼓が積まれ、太鼓の音、歌や踊り、ほら貝の音

などがパレードを盛り上げた。そして、首都に拠点を置くワン・スモールバッグ劇場の有名な役者の一人が、拡声器を使って「伝統経済とは何だ？」と叫ぶと、「それは自立への道だ！」という轟音のような返答が返ってきた。

このパレードはヴァヌアツの六つの州の人々ごとに列を作ったが、それぞれの州の先頭には、伝統経済に関するスローガンを掲げた垂れ幕が掲げられていた。トルバ州は、「伝統経済：幸せの源」、サンマ州は、「伝統経済：生活の源」、ペナマ州は、「伝統経済：それは我々の基盤。それを売り払うな」、マランパ州は、「伝統経済：それはアイデンティティ」、シェファ州は、「伝統経済：それは我々の土地を守る」、タフェア州は、「伝統経済：それは生活を守る」というスローガンである。



写真1 2006年のポートヴィラでのパレード（写真中央の、マットを抱えヤリをもっているのが首相のハム・リニ首相、その隣が首相夫人。提供：カーク・ハフマン氏）

これらの集団は、セレモニー会場となる全国チーフ評議会の会議場前広場で待機していた大勢の人々と合流した。そこでは、フランス大使、中国大使、EUの代表、ニュージーランドの高等弁務官など、海外からの外交官らが待ち受けており、パレードに参加していたオーストラリアの高等弁務官も加わった。そこで、全国チーフ評議会が中心となって、伝統的食糧やバスケットなどの贈与や再分配などの儀礼が行われた。全国チーフ評議会の議長に対して贈与される積み上げられた各州の食料などを前にし

て、議長は、「これは伝統経済が力強く生き残っている証だ。ヴァヌアツにおける敬意の根幹は、こうしたやり方の中に見出せる。我々はそれを与え、再び受け取る。我々は下から始め、上に登っていく。そして上から再び下に戻ってくる」と演説した。これらの食料は、ヴァヌアツ国民に還元される意図で議長に託されたのである。そして、これらの食料は石蒸し料理として参加している人々に配布されることになった。

石蒸し料理に入れる肉として、豚の肉が首相から提供されることになった⁽⁵⁾。しかし首相は豚をあまり持っていないので、それらの豚を各国の外交官から贈与してもらおうという演出が行われた。8頭の豚が各外交官から与えられるというやり取りが行われた後、今度はそれら8頭に首相自身の準備した3頭を加えた豚を、議長に贈与するための伝統的な儀礼が行われた。豚の与え手は首相であり、受け手は議長である。二人とも伝統的な衣装に身を包んで儀礼に臨んだ。首相は手には弓と矢をもち、広場に繋がれた豚1頭ずつを矢で射ていった。そのたびに、豚の等級が大声で告げられた⁽⁶⁾。すべての豚を射終わると、議長が踊りながら豚の周りをまわり、最後に「これが我々の儀礼場だ。互いに手を携えよう、そうすれば、人々に食料を与えることができる」と演説した。そして豚は解体され肉として芋類と一緒に石蒸し料理に伏され、人々に配られた(Huffman 2007:2-4. 6-8)。

ハフマンはまた、伝統経済宣言を受けて、全国チーフ評議会が下部の各地区のチーフ評議会に出した通達についても報告している。それは次のようなものだった。「婚資を80,000 ヴァツ (ヴァツ=ヴァヌアツの通貨) にするという1998年11月14日付の方針は、今や終わった。チーフと人々は、もはやそれに従う必要はない。階梯に関する儀礼、名前の獲得儀礼、葬送儀礼その他の伝統的な儀礼では、ヴァツ通貨はもはや使われない。すべての伝統的儀礼はカスタムに従い、そこでは伝統貨幣だけを使わねばならない。それぞれのチーフ評議会はこの新しい方針に沿って、自分たちの地域の儀礼には正しい伝統的な支払いをするよう決定せねばならない。なぜ方針を変更したのか? 伝統的な婚姻のやり方は、家族と共同体の結びつきを育み強固にしてくれる。そしてそれは、伝統的な生活における女性の重要性と地位を認識させてくれる。もし我々が婚資をヴァツで支払ったなら、女性への敬意を損ね、我々男性は女性たちを何者でもない(つまり単なる商品である)かのように見做していると思われる危険に陥る。我々すべては、ヴァツは我々の伝統に居場所がないことを理解すべきだ。自分たちの固有の伝統に従って結婚し、伝統的な儀礼を行うこと、ヴァツを使わないように」(括弧内は筆者の補足。以下の直接引用文でも同様)(Huffman 2007:26)。

その後も、ヴァヌアツ文化センターを中心に活動が継続したという。ハフマンによれば、ヴァヌアツ文化センターでは伝統経済プロジェクト国家推進委員会を立ち上げ、メンバーとして、全国チーフ評議会、土地庁、教育省、全国女性評議会、保健省、トゥラガ・ネイションなどから代表を募ったという。そしてそこでは以下の点が確認された。1: 伝統的な儀礼における伝統的財の奨励、2: 学校、保健関連、裁判所などで

の費用の支払いに伝統的財を使うことの奨励、3：伝統貨幣や富の生産の奨励、4：伝統的な島食材の生産と消費の奨励、5：島と島の間におけるカヌー交易などの伝統的な交易の奨励、6：ヴァヌアツ人が近代貨幣を蓄えるのを助ける、7：伝統経済を、生活指標の量ではなく質を通して計測するやり方を開発する、8：伝統的なガヴァナンス体系の奨励、9：土地と環境の良き管理奨励、10：近代的な教育システム内での伝統文化の奨励、11：伝統医療の使用の奨励、12：できるだけディーゼルやガソリン使用に代えてバイオ燃料を使用することを奨励、13：海外からの投資プロジェクトが自立、環境、適正な土地利用、伝統経済に対する国民の視点を支持するようなものであるかどうかを評価することを奨励(Huffman 2007:43)。

そしてヴァヌアツ文化センターは伝統経済に関するポスターを作り、その中に、ヴァヌアツ国立文化評議会の長官であったラルフ・レーゲンヴァヌの演説などからとった次のような言葉を印字したという。それは「伝統経済は、我々の最も大きな経済だ。ヴァヌアツにおける近代貨幣の90%以上は、ポートヴィラ内でだけ流通している。しかし、ヴァヌアツ人口の80%は町から離れた田舎で生活している。これらの人々が、寝る場所がないとか飢えるとかいう世界の他の場所で起こっている社会問題をほとんどもたないのは、どうしてか？それは、彼らが、彼らの祖先たちがかつて保持し現在に至るまで保持し続けている土地で、家族やクラン、あるいは部族の単位で生活しているからである。彼らは、伝統的なやり方にしがたって、生活に必要なすべてのものや食料のほとんどをこの土地から手に入れているのだ。人々はまだ自分たちの言語を話している。彼らは、伝統的なリーダーの統治下であり、チーフたちは、ヴァヌアツに平和と調和を継続的にもたらしている伝統的なやり方に従って、ほとんどの争議を処理している。我々は全員、ヴァヌアツのすべての人に豊かな生活をもたらしてくれる伝統経済に頼っているのである」(Huffman 2007:44-45)。

さて、以上のような「伝統経済の年」宣言にまつわる出来事を概観して、トゥラガ・ネイションとの関連で議論を整理しておこう。宣言を提唱したハム・リニは、独立運動の指導者で初代首相ウォルター・リニの弟である。ウォルターは、独立直後の1986年から経済的自立のためのプランを立ち上げ、その実現に邁進してきた。それから10年後、弟のハムは伝統経済の重要性を強調することになったのである。この動きには、トゥラガ・ネイションの視点と何らかの関連を持っていると考えることは間違いではないだろう。というのは、トゥラガ・ネイションのスポークスマンであるヒルダー・リニは彼の妹なのである。そして、ヒルダーは、2004年にハムが政権を獲るや否や、務めていたフィジーの太平洋利害関連資源センターの所長職を辞してヴァヌアツに戻り、ハム政権の下でオフィサーとして仕事を行ってきているのである。また、トゥラガ・ネイションのヴィラレオは、ウォルター・リニの経済的自立のプランを自分流に引き継いでいると考えており、それが伝統経済の自立という視点へと発展していったと考えている。さらに、「トゥラガ・ネイション (その1)」で述べたことだが、ヴィ

ラレオがその考え方を称賛しているチーフ・サイラスは、ハム・リニの岳父である。このように考えると、ハム・リニの「伝統経済の年」宣言は、彼を取り巻く知的環境から考えて必然的に起こったといえよう。

しかし、政府の公式の宣言としてヴァヌアツ全土で認定を受けるためには、全国チーフ評議会と連携する必要がある。そのため、全国チーフ評議会に参加していないチーフ・サイラスや評議会を批判して先住民議会運動を展開しているヒルダー・リニは、この伝統経済の年宣言にまつわる行事に出番がなかった。かろうじて、ヴァヌアツ文化センターが立ち上げた伝統経済プロジェクト国家推進委員会に、トゥラガ・ネイションのメンバーも参加したが、出来上がった推進目標は、近代化の範囲での伝統という色彩が強かった。たとえば、伝統文化の教育に関しても、近代教育システムの枠内で行うという制限が設けられたのである。

ヴァヌアツ文化センターが作ったポスターに刷り込まれた台詞の主、レーゲンヴァヌは、ヴァヌアツ国立文化評議会の長官を務めた後政界に進出し、伝統経済を強くサポートする閣僚として活躍した経験をもつ人物である。彼はトゥラガ・ネイションをテーマに2012年放送されたオーストラリアのテレビ番組に出演し、「我々（政府）は、国の20%にだけしか存在していない経済、しかも人口の20%にだけにしか影響を与えないような経済を、推し進めてきてしまった」と述べ、次のように続けている。「ヴァヌアツは幸運だ。というのは、我々は、世界の他の大部分が突き進んでいるのとは異なった種類の社会、異なった経済、異なった生活様式をいまだに思い描くことができるからだ。地域経済のアイデア、グリーン経済のアイデアを我々はすでにもっている」⁽⁷⁾。

しかし同じ番組でハム・リニは、「そのとき（2007年）以来、そして今日まで、伝統経済が機能するようなサポートを政府は何もしてこなかった。しかしそのときから、伝統通貨は政府にたよらず、使われ続けている」と述懐している。そして「私が今政府内でできることは、ヴァツについて語られている憲法の条項を修正することだ。今日、憲法はヴァツについてしか語っていない。憲法は伝統経済に触れていない・・・」と発言している。伝統経済の自立に向けて、トゥラガ・ネイションとは別に、政府サイド、あるいは議会サイドからの働きかけがあるということだが、それが持続的に多くの支持を得ているというわけではないといえよう。レーゲンヴァヌは、ヴァヌアツは伝統経済やそれに関連する伝統文化を犠牲にして資本主義的貨幣経済に従ってきたが、これは愚かなことであるだけでなく、新自由主義経済の視点からみても、わが国の発展に対して極端に効果のない政策でもある、と強調するが、少数意見で終わっているということなのである(Huffman 2005:9)。

2 トゥヴァツ紙幣の写真リリースを巡って

2014年9月18日付のヴァヌアツの新聞デイリーポスト紙は、9月13日に10種類のトゥヴァツ紙幣の写真がリリースされたと報道した。それらは、1トゥヴァツ、2トゥヴァツ、3トゥヴァツ、10トゥヴァツ、20トゥヴァツ、50トゥヴァツ、100トゥヴァツ、200トゥヴァツ、500トゥヴァツ、1000トゥヴァツ紙幣である(Vanuatu Daily Post 2014a)。この点に関して、それをリリースしたヴィラレオは次のように語っていると報じられた。「トゥヴァツ通貨は独自のものだ。というのは、それはヴァヌアツと世界経済内における土着の経済価値体系を反映しているからであり、ヴァツや他の世界の通貨と一緒に用いることで、ヴァヌアツ内やグローバルに生じている経済危機を解決するのに用いることができる⁽⁸⁾。トゥヴァツのサンプル写真をリリースしたのは、ヴァヌアツでは今や土着通貨の発展過程が最終段階にあることを示すためである。トゥヴァツ紙幣の印刷は、伝統的な経済セクター内だけではなく、リヴァツ(トゥラガ・ネイションで考案された豚の牙をベースとした通貨単位)の伝統経済とヴァツの公的経済の間に現存する交換媒体に新たな価値を付加するだろう」(Vanuatu Daily Post 2014a)。



図1 5トゥヴァツ紙幣⁽⁹⁾

デイリーポスト紙によれば、ヴィラレオはさらに、土着通貨を切ったり印刷したりすることは、外国が作った通貨が導入される前のメラネシア文明で実践されてきたことであり、トゥラガ・ネイション内にある伝統通貨生産センターは、貝貨やリヴァツを切り、貨幣マットを印刷し続けている、と説明したという。また、同ネイションの最高権威機関はヴァヌアツ政府に手紙を書き、トゥヴァツ紙幣の印刷費を援助してくれるように頼んだという。そしてその手紙の中で、次のような点を指摘したという。

つまり、ヴァツはチーフ達の期待を満たさなかった、1983年にヴァツが発行されたときは、ヴァヌアツのすべての経済、つまり、伝統経済も西洋から導入された公的な経済も含めて、新しい通貨がこれら経済に適用されると期待した、しかし何年もたって、ヴァツ通貨は公的な経済体系にだけしか使われていないことが分かった、したがって、二つの経済体系を計測し価値づけるやり方を発展させる土着のガヴァナンス体系を確立する決心をした、と。

ヴィラレオは、政府の回答を待ったが、回答はヴァヌアツ準備銀行からなされた。9月28日付のデイリーポスト紙で報道された内容を、簡単に箇条書きにまとめれば以下のようなものとなる(Vanuatu Daily Post 2014b)。つまり、①準備銀行法と2009年8月24日の閣僚会議によって、ヴァツはヴァヌアツの法貨の地位をもつ唯一の通貨であると認められているのであり、トゥヴァツは法貨とは認められずヴァヌアツの法の下でもその地位はない。②準備銀行で、ヴァツとの交換はできない。③準備銀行は、紙幣やコインを発行する唯一の権利を与えられており、他の何人も通貨や銀行紙幣やコインを発行できない。この法を破れば罰せられる。④準備銀行は、代替通貨を発行することで準備銀行法を破ろうとするいかなる個人、制度、組織に対しても寛容ではない。⑤何人も、ヴァヌアツ準備銀行の認可なしにヴァヌアツで銀行業務をすることはできない。

これを受けてヴィラレオは、自らの立場を主張する記事を10月3日のデイリーポスト紙に掲載している。それを引用しよう。

「ガオゴゴンナ運命準備機構の総裁として、また科学、哲学、人文、技術についてのメラネシアン・グローバル学校の教授として、2014年9月27日付⁽¹⁰⁾のデイリーポスト発行の4248号にあるトゥヴァツ通貨に関する記事への返答を述べる。

準備銀行やその他の混乱している人々に明らかにさせてほしい。トゥヴァツは、準備銀行法と金融制度法によって規定されているヴァヌアツ準備銀行の法貨ではない。トゥヴァツは、土着経済を価値づけ、慣習法とヴァヌアツ憲法と国連先住民権利宣言によって規定されているガオゴゴンナ運命準備機構の財産である。トゥヴァツはそれゆえ法貨ではありえず、法貨として認定されるはずもない。それは、ヴァツに代わる通貨ではない。準備銀行法の第20条1項によって、準備銀行が発行する通貨のみが法貨とされている。トゥヴァツについていえば、それは準備銀行が発行していない。それはガオゴゴンナ運命準備機構によって発行されている。

準備銀行法の第17条は、法貨としてのヴァツ発行の唯一の権利について言及している。この条項は、ヴァツであるかのように誤解させる意図をもってヴァツに似た通貨を発行しようとすることを、すべての人に禁止している。トゥヴァツはヴァツと間違われることはあり得ない。というのは、それは類似の名称、デザイン、色、そして法で規定された類似性をもってはいないからだ。

金融組織法に関連していえば、法は明確に銀行業務を行う団体を金融組織として規定しており、これはすべての伝統的な組織(custom institution)を排除している。土着経済評価機構の長として、私はヴァヌアツ準備銀行とその出資者たちに次のことを思い出してほしいと思う。つまり、ヴァヌアツ政府は公的に2007年を「伝統経済の年」であると宣言し、2009年の閣僚会議は、科学、哲学、人文、技術に関するメラネシアン・グローバル学校が2009年に公式に提起した「ヴァヌアツ伝統経済の自立宣言」を認めている、ということ。その会合では、ヴァヌアツ中の部族王国の代表2,500人が、伝統経済自立の公式の旗掲揚儀礼を目撃しているのだ。

伝統経済はヴァヌアツに存在しており、人口の80%を維持している。伝統経済の存在は、伝統的な経済取引が行われていることを示している。伝統的な経済取引を仲介する交換媒体は、伝統経済の供給者と消費者を結び付けるために必要である。トゥヴァツは、伝統経済の新しい交換媒体であり、我々の経済を更新し改良するための最も新しい開発なのだ。最後に、ヴァヌアツ準備銀行に、慣習法、ヴァヌアツ憲法、そして国連の先住民権利宣言のすべての文脈を理解する上での基本的な知識と能力を更新してくれることを望む。準備銀行がヴァツ経済内部で現存する土着の交換媒体を認めないのであれば、ガオゴゴンナ運命準備機構は、ヴァヌアツ国民の80%の通貨需要に奉仕するトゥヴァツ通貨を含めて、伝統経済における現存する交換媒体の使用を守るシステムを作動しつづけるだろう」(Vanuatu Daily Post 2014c)。

以上ヴィラレオの言説を比較的長く引用したが、この記事の最初では、デイリーポスト紙がヴィラレオを紹介して、ギギンヴァヌア伝統政府(Guigivanua Kastom Kavman)のリーダーで、ガオゴゴンナ運命準備機構(Gaogogona Destiny Reserve System)の総裁という肩書を掲載している。前者は「政府」という言葉を使っていることから考えて、もはや、トゥラガ・ネイションという名称にある「ネイション」を国家のような位置づけにしているかのような印象を与える。そしてその国家内部では、準備銀行制度をつかさどるガオゴゴンナという組織が機能していると捉えることもできる。したがって、ヴィラレオは、ヴァヌアツ国家内に別の国家をつくるような動きをしているという評価を得ることもあり得ることである。

しかし文面をよく読むと、ヴィラレオは近代と伝統を対比して、近代をヴァヌアツ政府とヴァツによる経済システムに位置づけ、伝統をトゥラガ・ネイション内に設けた伝統政府、そしてリヴァツによる伝統経済システムに位置付けるという二分法を実践しているといえよう。ヴァヌアツのピジン語では、カスタムに対して西洋近代から流入してきた新しい側面をスクール(skul)として区別することがあるが、そうした概念を用いていけば、ヴィラレオは、カスタムとスクールの併存を想定しているということなのである。

3 ヴィラレオの逮捕と彼の主張

リヴァツ紙幣の写真をリリースした翌年、ヴィラレオは逮捕された。それはリヴァツ紙幣のリリースによるヴァヌアツ経済の混乱という罪名ではなく、家を焼き家財を焼失させたという罪だった。新聞で報道された経緯は次のようなものである。

ヴィラレオは、ラヴァトマンガム村の海岸で海産物を収穫してはならないというタブーをかけたが、隣村の2人の男がその海岸でナマコを取った。それに対してヴィラレオは、タブーを破ったため、罰金を払うか自ら村落を離れる村落離脱を取るかを迫ったが、彼らが従わなかったため、ナマコを取った人々の家を焼き払い、実質的に村を追い出したというのだ。前年には、ヴァヌアツの伝統経済の自立とリヴァツ紙幣のリリースを熱く語っていたヴィラレオが、なぜ、こんな行動にでたのであろうか？

まずこの海岸にかけたタブーを説明しておこう。ヴィラレオは「閉じた海(*tahigoro*)」と呼んでいるが、北部ラガの伝統では、ボロロリ儀礼でチーフが豚を殺した後、チーフは自分の親族集団の土地の一部で収穫を禁止するタブー(*gogona*)をかけることができる。これは、一定の任意の期間、任意に選ばれた産物について課すことのできるタブーで、それは現在でも北部ラガで生きているタブーである(吉岡 1998:355-359)。ヴィラレオは、海岸でかけたタブーを犯した者を追放するのは伝統的なやり方に則っており、この退去命令は2015年12月11日にナカマル(集会所)で行われたチーフたちの会合で決定したが、そのとき、ナマコを取りに来た人々も、タブーをかけられた海岸でナマコをとったことを認めていた、と主張した(Vanuatu Daily Post 2018c)。

ヴィラレオと彼と行動を共にした8人、合わせて9人が2016年、最初に法廷に呼ばれたとき、彼らは伝統的な裸の衣装で登場した。判事は、法廷を侮辱することになると言って洋服に着替えるように促した。そして判事は10分間の着替えの時間をとったが、世界中を伝統的衣装に身を包んで登壇してきたヴィラレオは、洋服よりも伝統的衣装のほうがより敬意を表していると主張し、着替えることはなかった。そこで判事は、ここはナカマルではない、伝統的衣装でいることは法廷を侮辱することになると述べ、3日間の拘留を言い渡した。この出来事に対して、ヒルダー・リニは、彼らは伝統的衣装に誇りをもっていると述べつつも、洋服に着替えるように期待されるとコメントしている。この出来事は、チーフが洋服を着るように強制されることで自分の権利が侵害されたと主張したとして、ヴァヌアツで大きな反響を呼んだ。ヴィラレオは、焼き討ち事件を伝統文化の視点から捉えることを強調したのである⁽¹¹⁾。

さてその後、ヴィラレオ側は、彼が逮捕されることになった一連の行為は慣習法の管轄で裁かれることあり、裁判所による公判にはそぐわないと訴えたため、まずその件について2018年に審議されることになった。ヴィラレオの弁護士は、ヴァヌアツ憲法第74条で謳われているように、慣習法(*rules of customs*)はヴァヌアツにおける土地利用と所有権の基礎になっている、と述べた。そして、通常はチーフたちにある慣習

的な権威(custom authorities)は、土地、リーフまでも含めた海岸に関する慣習を統治し、管理し、実行し、強化する権利を伴っており、ヴィラレオは、チーフとして海のある部分に対してタブーをかける権利をもち、その結果、誰もその場所に入ってナマコを捕獲することはできなくなる、と主張した。続けて、ヴィラレオはナカマルによって承認された慣習法に従ったのであり、こうしたことは、慣習法はヴァヌアツ共和国の法の一部として効力をもち続ける、と謳ったヴァヌアツ憲法の第95条3項によって認められていると論じられた。

これらの主張に対して、判事は次のように述べた。「ヴィラレオ氏は自称「慣習的(customary)」と呼んでいるが、二人の原告およびその家族に対してなされた罰金の課金、出ていけという勧告、そして最終的には強制的な追放行為、さらには彼らの個人的な財産への不敬は、全体に次の事柄と明らかに矛盾するように思える。つまりそれは、原告の守られるべき権利が憲法で明記されていることの本当の目的、意味、そして精神、また、ヴィラレオ氏の義務が憲法で明記されていることの本当の目的、意味、そして精神、さらには刑法でこれまで言及されてきた様々な規定に対して」(Vanuatu Daily Post 2018a)。

ヴィラレオ側の公判の無効という主張は退けられ、裁判の日程が決定した。そして最終的に判決が2018年12月に下され、懲役3年9か月が言い渡された。これに対してヴィラレオ側は上級裁判所に控訴したが、2019年に控訴が棄却され、刑が確定した(Vanuatu Daily Post 2019)。

ヴィラレオは、2001年、ニューヨークで開催された国連の先住民に関する会議で、彼の本拠地であるトゥラガ・ネイションについて初めて語り、それがヴァヌアツ政府の関心を引いたという。「私がニューヨークに行って以来、政府は私を監視し、私を反体制のように見なした」とヴィラレオは言っている。ヴィラレオのトゥヴァツ紙幣発行に関しても、ヴァヌアツ準備銀行は、もし彼が彼の通貨で交易を始めるなら可能な法的措置を起こすと宣言するまでになった。しかしヴィラレオは自らの立場を貫いた。彼は言う、「ヴィラの政府は、人口の20%の面倒見ているに過ぎない。政府は、町に住んで仕事をもっている20%の人々の面倒を見ているだけで、田舎にいる80%の人々は、自分たちの地方のチーフをもっているが、彼らを世話する政府はない」⁽¹²⁾。

ヴィラレオのとった行動は、現在の北部ラガのカustomから考えれば正当性がないといえる。というのは、現在の人々のCustom観では、タブーを破ったからといって追い出すために家を焼きはらったりすることは正当とは認識されない。しかしその昔は異なっていた。Customをどの時点まで遡って考えるのか、という点が論じられるべきであった。ヴィラレオは、近代国家として成立しているヴァヌアツの近代法を、慣習法とは別のものと位置づけている。そして、近代法に違反する「暴力による問題の解決」を執行し、それは慣習法では認められていたから問題はないというロジックを用いているが、彼が裁かれる場合は、伝統的なナカマルではなく、近代法のも

とで成立している法廷なのだ。その意味で、最初の裁判の判事が言った「ここはナカマルではない」という台詞は、ヴィラレオの主張しているカスタムとスクールの二分法に従っても、正当性がある。ただし、どの裁判での判事たちの主張もある意味で一方的であったといえる。彼らは、北部ラガにおける伝統には関心をもたなかった。ましてやボロロリ儀礼後のタブーの権利についても、知らなかった。ヒルダー・リニは、2019年8月27日に行った筆者とのインタビューの中で、何度も「白人の裁判」という言い方で裁判を振り返っていた。確かに、ヴィラレオの取った行動の背景にある伝統文化を、伝統的衣装を法廷侮辱と考えた判事は「この事件は深刻な犯罪であり、伝統とは関係がない」と言い切って、切り捨てているのである⁽¹³⁾。

4 ヴィラレオに対する評価

ヴィラレオは、近代の原理で動くヴァヌアツ政府に対して、伝統の原理で動く別の政府をラヴァトマンゲムに創ろうとしているかのような動きをしているが、そのことはまさしく、伝統文化を復興して国家を分断しようとする分離主義者に見えたのかもしれない。そしてそれは、アルジャジーラの記事に指摘があるように、ヴァヌアツ独立前夜に起こった分離独立の暴動を思い起こさせるのである⁽¹⁴⁾。

この分離独立の暴動を主導したのは、ナグリアメルと呼ばれる団体だった。この団体は、1960年代にエスピリトゥ・サント島の内陸部で、白人が買収した土地のうち白人が使用していない土地をメラネシア人に返還せよという運動を開始した。そして、白人に奪われた土地を取り戻し、白人が到来する以前の伝統的な生活に戻ることを、その運動の主たる目的としていた。この地では、1920年代からカーゴカルトなどの土着主義運動が頻発していたが、ナグリアメル運動は、それらの運動がもっていた不満や不安を引き継ぐ形で勢力を拡大していった。独立前のヴァヌアツは英仏共同統治領であったため、すべてのものはイギリス系とフランス系に分かれていたが、ウォルター・リニ率いるイギリス系の政党・ヴァヌアアク党が、それに対抗するフランス系の穏健派（多数の小さなフランス系政党の連合）を圧して独立へと進んでいた。

ナグリアメルは、アメリカの超保守集団であるフェニックス財団の財政的援助とフランス行政府の陰からの支援を受けることにより、独立運動で主導権を握ったヴァヌアアク党と対立する動きをとることになった。ナグリアメルは、ウォルター・リニがアングリカンの司祭であることに注目し、ヴァヌアアク党が政権をとればキリスト教が支配する神政国になり伝統文化は守られないと訴えた。そして、ヴァヌアアク党が独立宣言をしようとするその直前に、ルガンヴィルを武力で占拠し、分離独立を唱えてヴェマラナ共和国成立を宣言したのである。英仏共同統治政府はこれに対して何ら打つ手をもたなかったため、ウォルター・リニは自ら独立宣言をした後、パプアニューギニアに軍隊の派遣を要請して鎮圧したのであった。ナグリアメルのリーダーであ

ったジミー・スティーヴンスは逮捕され、長年投獄されることになった(吉岡 2005:43-67)。

こうしたナグリアメル運動とトゥラガ・ネイション運動は、しかし、主として以下の二点で異なっている。一つは、ナグリアメルには外部勢力の支援があったが、トゥラガ・ネイションにはないということである。前者を支援したフェニックス財団は、自由な経済活動ができる小さな独立国を創ることを想定して、財政的に軍事的にナグリアメルを支援したのだ。そうした背景のないトゥラガ・ネイションは、分離独立へ向かうことはできない。二つ目は、ナグリアメルが白人の到来する以前の伝統生活に復帰すること、つまり近代を拒否したうえで伝統に戻ることを目標にしていたのに対し、トゥラガ・ネイションは、近代の中に巻き込まれたヴァヌアツを認めたとうえで、伝統との折り合いを探ったということである。その点では、トゥラガ・ネイションとハム・リニ政権の政策とは相反するものではない。しかしすでに説明したように、政府は近代の原理から抜けることはできない。スクールの中でカスタムがいかにかに生存できるかを探るのがハム・リニ政権の方針だった。一方ヴィラレオは、都市部で作動する近代の原理を認めたとうえで、大多数の田舎で機能している伝統の原理を、ヴァヌアツという国のもう一つの軸にしようと考えたということである。ただし、伝統の原理を過去にまでさかのぼり、そのやり方を近代の働いている場で正当化しようとした点、つまり、暴力による制裁の正当化は、勇み足であった感がある。が、似たようなことは、ヴィラレオが「彼の言うことは正しい」と称賛した、チーフ・サイラスにも見られたことなのである。

筆者が長年フィールドワークの拠点としてきた北部ラガのラブルタマータ村が、チーフ・サイラスの村である。筆者は彼に息子として迎え入れられ、彼の行動を身近で見、彼の考え方を常に聞かされてきた。植民地統治時代には、イギリス行政側のアセッサ(現地人補佐官)を務め、独立運動のときには、ウォルター・リニを支持して北部ラガを取りまとめた経験を持ち、近代に対して大きな貢献をしてきたのであるが、一方で彼は、伝統文化の中で生きるように育てられていた。彼は、小学校を卒業して上級学校に行こうとするが、養父からそれを止められ、「私の他の子供たちは学校へいこうが、お前は島のことだけを知ればよい。そして、大チーフのヴィラティロが私に与えてくれたように私のすべてのものをお前に与えよう」と言ったという。その通り、サイラスは伝統文化にも精通し、島を拠点に、全国チーフ評議会に参加することもなく、伝統文化とヴァヌアツの行く末を常に考えてきたのである。

その彼が、現在人々が当たり前だと考えている慣習法を強引に変更し、人々から大きな批判を浴びたことがあった。あるとき彼は、自分の兄弟にあたる人物が亡くなったときすぐに未亡人を訪れ、「大丈夫か」と声をかけたが、慣習法では、男性が亡くなったときその男性と同じ親族集団の男性は 100 日間未亡人を訪れてはならないということだった。人々は、それは良くないことだと口々に言っていたが、やがてサイラス

がその未亡人と再婚したがっているといううわさが広がってからは、問題が大きくなった。そこで彼は、「昔の本当のカustomでは、ある男が死んで三日目でも十日目でも同じ親族集団の男性はその未亡人と結婚できた」と主張しはじめた。彼は、現在流通している慣習法ではなく、昔行われていたと思われる慣習法をもち出して反論したのである。大多数の村人は反対したが、結局はこの論法を押し通して、彼は再婚を果たしたのである。

ヴィラレオの「タブー違反への報復」は、現在の慣習法ではなくサイラスの言う「昔の本当のカustom」による慣習法だということになる。メラネシア世界では、リーダーの中のリーダーは、しばしば慣習法を変更する力をもつといわれてきたが、サイラスの事例はそれにあたる。ヴィラレオの思考も、それに近いものがあるといえよう。しかし、暴力による制裁容認は、慣習法の変更の限度を超えているといえよう。というのは、ヴィラレオは、伝統文化推進はキリスト教と両立しないわけではないと主張していたからである。サイラスも敬虔なクリスチャンであり、「昔の本当のカustom」では一夫多妻が行われていたとか、報復活動として相手を殺すことができたとかいって、その昔のカustomを現在採用しようとは考えないのだ。

サイラスの息子で政府のオフィサーでもあった人物は、まだトゥラガ・ネイションが大きな話題を提供する前の2003年時点で、「ヴィラレオはダークな時代に帰ろうとしている。すべてを過去に戻すのは反対だ」と言っていた。また彼は、「ヴィラレオは、ラガには独自の文字があったというが、その点になると多くの人はついていけない。それは砂絵に過ぎないものだ。文字ではない」という。彼はまた、ヴィラレオのいう伝統的な貨幣にも反対すると同時に、彼は「これしか道がない」という言い方をするがそれも問題だとも言う。「なぜヒルダーが彼を支援するのかわからない。ヴィラレオのメラネシア学校は校舎のある学校だがとても小さなサークルだ」という。しかしヴィラレオは海外の会議にも出ている、と筆者がいうと、ヒルダーが資金の援助をしているのだろうと言う。君もヴィラレオと同じようにサイラスの話は本当だと、と言っているのではないかと問うと、サイラスの考え方は自分やヴィラレオの考え方の中心にあるが、それを巡って行く道が異なっている、と説明した。解釈や実現の仕方が異なるということなのだろう。

2018年に、都市部でトゥラガ・ネイションの評判を調査したとき、多くの人々はその存在すら知らないか、あまり関心がなかった。海外メディアに取り上げられ、政府からも注視されてきた運動は、ヴァヌアツ各地のチーフ達には知られているとしても、いわゆる「普通の人々」にはほとんど影響を与えるに至っていないようであった。しかし、中には関心をもち、自らの批判的見解を吐露する者もいた。例えばアンバエ島出身者の一人は、「マットや豚の牙で貿易はできない。ペンテコストの中では良いが、他の島や他の国と交易ができない。銀行をつくっているようだけど、何を預金するのか？カustomは島だけのもので、他の地域や他の国との関係ではそれを前面に出せな

い。子供たちは学校に行く（ことで近代の原理を学ぶ）必要がある」という。彼に対して、「議会や全国チーフ評議会はカスタムを大事にしない」というヒルダー・リニやヴィラレオの主張を紹介しても、あまり意味はないのだ。彼には、それは「昔のカスタムに戻れ」と言っているように聞こえるのであり、それはあまり承服できかねる事柄なのだ。

ところで筆者は、1974年から2019年にかけて断続的に北部ラガでの村落調査とポートヴィラ、ルガンヴィルでの都市調査を行ってきた⁽¹⁵⁾。その間、北部ラガの人々のカスタムに関する意識も変遷してきた。独立前は、独立すればカスタムは戻ってくると考えていた。そして独立後の1980年代の前半は、確かにウイスキーに代わってカヴァを飲むのが一般的になるなど、身近なところでカスタムの復活が感じられた。もちろんスクールの影響は年々強くなっていったが、それでも2000年代初めまでは、人々はカスタムはまだ村落でしっかり機能していると考えていた。2010年代初めになると、現地語がビスラマに押されるようになってきて、若者たちは現地語を忘れていくという認識が出てくるようになり、カスタムの中核と考えられてきたボロロリ儀礼の細部が少しずつ変わってきたことは認識されていた。しかし人々の「嘆き」は目立ってはいなかった。ところが2010年代終わりには、ついに、カスタムそのものが変わったという意識をもつ人々が多くなったのである。人々は、「昔と比べると変わってしまった。近代化(modanizeisin)が進んだ、何もかも変わった」と嘆くのである。

そうした状況の中で、昔ながらのカスタムと蔓延する近代化とをどう折り合いをつけていけばいいのか、と真剣に悩む人々も多くなった。ルガンヴィルで話したある男性からも、また北部ラガでも複数の人々から、筆者はまさにそうした質問を受けた。1974年の段階から、日本は自動車などをたくさん作っており近代の側面で大きな役割を演じていると同時に、カスタムが強いと聞いているが、どうしてそれが可能か、という質問はよく受けた。しかし今は、自分たちの問題として、押し寄せる強大なスクールの前で消えゆくカスタムをどうしたらいいのかという切実な悩みとなっているのだ⁽¹⁶⁾。

こうした時代状況の変遷のなかで、トゥラガ・ネイションの活動を高く評価する人々も、少数ではあるが当然生まれる。ある人は、「彼らの仕事は素晴らしい。カスタムを復権させる仕事をしている」という。近代の波で窒息状態になっていると感じている人々は、伝統を懐かしむ。しかし、どこまで昔の状態に戻せばいいのか、近代国家ヴァヌアツの中でカスタムをどのように位置付ければいいのか、という問題までには話は進まないのだ。こうした状況の中で、ラブルタマータ村のあるチーフは、冷静に次のように分析した。「ヴィラレオと話をしたことがあるが、彼の言うことはとても良いと思った。ただ、ラガでは良いけど他の島の人々が理解するのは難しいだろう。ラヴァトマンガムには各島のチーフ達が視察にやってきたが、どの島でもラヴァトマンガムのようなことはしてはいない」。

5 ヒルダー・リニの思想

トゥラガ・ネイションをリードする二人の人物、ヴィラレオとヒルダー・リニは、お互いに少し異なる視点をもっている。ここでは、ヒルダー・リニの考え方を探ることにしよう。

彼女は、パプアニューギニア大学でジャーナリズムを学び、1979年に卒業。在学中の1976年から1977年にかけて、*New Hebridean Viewpoints* の編集者を、卒業後の1980年には *Nasiko News Magazine* の出版者兼編集者を務め、ジャーナリストの道を歩んでいたが、1980年から1982年にかけて、非核と自立の太平洋(Nuclear Free and Independent Pacific) 推進委員会のメンバー、1982年から1986年まで、南太平洋委員会(現在の太平洋共同体)の女性プログラム担当官に就任し、国際的な活動を展開する。

1987年、ヴァヌアツで最初の女性国会議員の一人に選出され、1998年までその座にあった。その間、1991年から1993年まで地方水道・保険担当大臣となり、そのとき、世界保健機構に働きかけて、同機構がハーグの国際司法裁判所に核兵器の合法性に対する疑問を提出するようにさせている。1993年には外務・観光担当大臣代理となり、1996年には法務・文化・女性問題担当大臣になった。1998年からは政界を離れ、2000年から2004年にかけてフィジーにある太平洋利害関連資源センター(Pacific Concerns Resource Centre)の所長を務めたが、その間、国際平和ビューローの副会長にもなり、2004年には、国連の核不拡散評価会議の太平洋地域代表となっている。そして彼女の非核運動に対して、2005年に、ドイツの財団から非核未来賞(Nuclear-Free Future Award)が与えられており、同年、ノーベル平和賞プロジェクトが考える1000人の女性候補の一人にも選ばれている⁽¹⁷⁾。

ヴィラレオとは異なり、近代システムの中でエリート街道をばく進してきたヒルダー・リニは、近代の原理を徹底的に身に着けているといえよう。その彼女が、「トゥラガ・ネイション(その1)」で論じたように、選挙で選ばれる全国チーフ評議会を批判し、西洋の仕組みに則らない先住民議会をつくるための運動を展開してきたのである。しかし彼女は、トゥラガ・ネイションが伝統文化復興運動として捉えられるのを嫌う。トゥラガ・ネイションはヴァヌアツ中に47あるネイションの一つで、それは北部ラガの「地域」を指しているに過ぎないというのだ。また豚の銀行について、「ヴァヌアツ人の20%だけしか銀行などを利用した資本主義経済に巻き込まれていない。残りの80%は、こうした経済活動から締め出されている。そこで、自分たちの伝統に従った各ネイションに合わせたやりかたで銀行のようなものを作れば、これらの人々も伝統経済の中に入ることになる。すべての島で、伝統経済を活性化させることが狙いだ」という。筆者は彼女に、「カスタム銀行は、銀行という以上近代の仕組みを使っているが、それはカスタムなのか？」と聞いたら、「カスタムとスクールは二つで一つだ。カスタム銀行は、少し銀行だけど多くは銀行ではない」というのだ。

ヒルダー・リニは、どうやらスクールとカスタムをまとめようとしているらしい。2016年のデイリーポスト紙にヒルダー・リニのインタビュー記事がでていますが、ここにそれを引用しよう。彼女は次のように主張しているのだ。

「(独立によって)我々は自分たちの土地と自由を取り戻した。しかしそれから36年経ったが、我々はいまだによりよい労働条件を手にはしていない。季節労働で海外に渡ったときでも、人々はいまだに公平に賃金を支払われていない。経済的自立は、1980年のときの国家発展のゴールだった。インフラが整備され始め、10年でそれが達成されることが望みだった。しかしその代わりに、我々は政権抗争にあけくれ、10年の終わりまでには、政府は自国民によってぐらつかされる事態となった。私は、外部からの影響に巻き込まれたことが国民の利益のためになっていないと固く信じている。

我々はいまだに独立の果実を待っている。政府は近代的な経済(modern economy)と共存させるように土着体系(indigenous system)を評価しようとはしない。人口の80%は土地に依存して暮らしており、伝統的な通貨を使っている。ヴァヌアツ憲法はすでに二つの体系が共存することを認めているのだ。しかし、人口のたった20%しか近代経済に支えられていないとすれば、我々は参加する機会をもたない大多数のマジョリティについて考えなさすぎる。

近代の富はすべての人々の手に入るものではない。そしてそれが盗みの原因だ。人々は数千年の間伝統的な生活様式で平和に暮らし続けてきた。そして今日、彼らは現金経済の体系に入るように告げられているが、彼らには入るべき居場所がない。なぜ現金経済体系に入る必要があるのか。彼らは自分たちの土地をもち、自分たちの食料を生産している。私は(トゥラガ・ネイションにある)メラネシアン・グローバル学校と共同でメラネシア文化を反映したシステムを推進している。不幸なことに、政府はそれを知ることに関心を示してはいない。おそらく彼らはこの(西洋的な)体系にいることがあまりにもいごちが良いのであり、伝統(indigenous)と近代(modern)を結び付けたくはないのだろう。でもそれはなされねばならない。

私は、ヴァヌアツは我々皆に属していると信じている。我々はみんなで作りを上げた。土着のヴァヌアツ人だけでなく、投資家や何世代も住んできた外国人居住者もいっしょに。そして互いに尊敬していくべきだ。土着の統治制度は共同体と平和に関連しており、一方、外国の制度は個人主義と競争と関連している。将来、私は土着の体系が近代の体系に統合していくのが見たい。我々皆の居場所はある。しかし、ある者は恩恵を受け他の者は受けたくないようなものではなく、全ての人々が尊厳をもてるように、物事を統括していく必要がある」(Vanuatu Daily Post 2016)。

この主張から明らかなように、ヒルダー・リニは近代の体系と伝統の体系を融合さ

せようとしているのである。そして筆者に対しては、カスタムとスクールの「通訳者」として動いていると述べていた。それは、二つのシステムを分離したまま共存させるというやり方を目指しているように見えるヴィラレオのやり方とは、一線を画しているのである。そして誰も、彼女は「ダークな時代」に戻ろうとしているとは考えない。そしてまた昔の慣習を蘇らせようとしているとも考えない。ヒルダー・リニは近代の人である、と誰もが考えているからだ。ヴィラレオは、豚の銀行構想に関して、銀行という近代の仕組みは実は昔からの伝統に存在していたという論法を用いていた。そして、タブーを破った者は昔の慣習法では追放されたという視点から、暴力による追放を実行した。彼は、カスタムの復権を昔にまでさかのぼって掘り起こそうとしたため、彼の言うカスタムは現代の人々が西洋との対比で生み出した伝統概念(カスタム)とは、ニュアンスが異なるようになってしまっているともいえる。伝統の復権をことさら強調しようとするのは、ヒルダー・リニも同じだ。彼女もカスタム(あるいはインディジナス)の復権を強く訴える。しかしそれは、あまりにも伝統文化が軽視されてきたからである。しかも彼女の考える伝統というのは、「昔の本当のカスタム」ではなく、西洋と対比して生み出された伝統概念カスタムそのものなのである。

おわりに

ヴァヌアツ独立運動のリーダーであったウォルター・リニは、独立に際して出版した自らの著作で次のように述べている。つまり「私は、慣習(custom)を発展と対立するものとして考えることには反対する。・・・私は慣習と伝統的やり方は発展への力として利用するものと捉えたい。結局、慣習はダイナミックなのであり、過去に明らかに行われてきたように、慣習は変化し続けられない理由はないし、それ自身を適応させ続けない理由はない」(Lini 1980:30)。ウォルター・リニは、英語でカスタムと述べているが、明らかにビスラマにおけるカスタムを意識しており、カスタムは変化する、伝統は発展し続ける、という見解を示していると言える。そしてその視点からヴァヌアツ創りを開始した。彼の考える「変化するカスタム」は、近代の仕組みを導入することでカスタムも影響を受けるということを念頭に置いていたのだろう。彼の政策は、いわば、カスタムのスクール化であった。その結果、全国チーフ評議会に象徴されるような伝統的なカスタムの世界を、近代国家の枠内でスクール化させながら持続させようとしたのであった。

カスタムのスクール化は、しかし、うまくいかなかった。というのは、村落部で生活するヴァヌアツの大多数の人々の視点では、カスタムとスクールは対立するものであり、もしスクール化が強化されれば、それはカスタムの消滅を意味していたからである。その点を声高に叫んだ最初の政治団体が、ナグリアメルである。独立すればカスタムはなくなる、と主張したナグリアメルは、カスタムの世界にだけとどまる道を

選ぶ。そしてスクールがつくるヴァヌアツ共和国とカスタムが作るヴェマラナ共和国という二分法を成立さえ、分離行動にでたのである。一方、この動きを抑え込んだウォルター・リニは、近代国家にあってもカスタムを重視する政策を掲げたが、年の追うごとに、カスタムは形だけのものになっていったといえる。

ハム・リニが目論んだカスタム経済の復権は、消えつつあるカスタムをもう一度前面にだすための試みだった。政府のこうした公的な宣言は、しかし、具体的な措置を伴うことはなかった。全国チーフ評議会は、カスタムに関する行事や儀礼はカスタムの中で行うという方針を採用し、ヴァツではなく伝統的な財を用いることを奨励した。それは、カスタムの復権であるかのように映ったが、自らがスクール化したカスタム集団であるチーフ評議会が主導するカスタム復権は、スクール化という既定路線を抜け出すことはできなかった。そのことは、すでに紹介した彼らの新しい方針からも読み取れるだろう。そして、トゥラガ・ネイションは、ハム・リニの政策から生まれた伝統経済プロジェクト国家推進委員会にメンバーを送り込んだが、そこで決まった事柄も、基本的にスクールの枠内でできるカスタムの推進だったのだ。

こうした状況に対して、ヴィラレオはスクール化されないカスタムを復権させることに力を注いだ。しかしスクールの世界がカスタムをも巻き込んでいく状況の中で、カスタムをスクールに対抗させるため、「先祖返り」が進むことになった。「昔の真のカスタム」という視点がヴィラレオに生まれてきたのも、そうした現象の一つといえる。しかし、カスタムとスクールが併存するバイカルチュラルな世界を生きていたヴァヌアツの大多数の人々が求めていたカスタムは、昔にあったであろうような慣習ではなく、西洋とは異なった形での慣習であった。彼らは、洋服を着た日本人がお互いにお辞儀をして挨拶する姿を見て、日本はカスタムが強いと言うのである。昔どんな伝統が日本にあったかが問題にはならない。今、西洋と異なるやり方をもっていることこそが、まさしくカスタムの印なのだ。

一方、ヒルダー・リニは、兄ウォルター・リニの「変化するカスタム」を否定していく。それは全国チーフ評議会を批判していることから分かるであろう。カスタムがスクール化されたら、それはカスタムではなくなるのである。彼女は、スクール化されたカスタムに反対し、カスタムの復権を唱えるが、それはヴィラレオの想定する「昔の真のカスタム」ではない。豚の銀行は、ヴィラレオにとっては、昔からのカスタムにある原理（クレジット、デヴィッド、複利など）を用いたカスタムそのものだったが、ヒルダー・リニにとっては、スクールの原理を用いた銀行を、伝統経済のためにカスタム用に変換させるという位置づけだった。それは、いわば、スクールのカスタム化とも呼べるものだったのである。

彼女は、伝統と近代を統合させることを考えているという。伝統と近代は二つで一つだという。そして伝統と近代の「通訳者」として行動してきたと言う。世界にその名を知られた近代人であるヒルダー・リニは、近代を否定できないことを前提に両者

を統合しようとする。もしカスタムをスクール化すればカスタムは消えてなくなる。カスタムとスクールの併存を推し進めれば、カスタムの祖先帰りとスクールの西洋化が加速される。そこで取った手法が、スクールのカスタム化ということだったのである。スクールのカスタム化というのは、例えば日本で、伝統的な踊りを復活させるためにそれを教える学校を作るといったこととは異なる。それは近代を生きる人々が自らの伝統を勉強するということである。ヒルダー・リニがやろうとしていることは、近代の恩恵に浴していない大多数の人々に、その恩恵を与えるための方策である。スクールをスクールとして提供しても受容されないので、人々が受容できるカスタムに変換して提供しようというのである。

トゥラガ・ネイションは、ヴィラレオとヒルダー・リニという二人のリーダーによって推し進められてきたカスタムに関する実験であった。伝統的衣装に身を包んだヴィラレオを前面にだして人々に訴えかけることは、たしかにカスタムを再認識させるためには重要だったし、国連の一連の先住民に関する宣言にも沿った形だった。ヴィラレオが逮捕されて休止しているトゥラガ・ネイションの活動は、ヴィラレオが戻ってくれば、再び活性化するのだろうか。ヒルダー・リニは今後どのようにかかわっていくのだろうか。彼女は現在、政党活動に復帰して国会議員として再び活動を開始することを考えているという⁽¹⁸⁾。国会の場から、自らの思想を実現しようとしているのかもしれない。メラネシアの小国は、伝統と近代の相克という大問題を解決する指針を、世界に向けて発信できるようになるのであろうか。

註

- (1) ヴァヌアツでは独立と同時に、近代とかかわる議会と並んで伝統とかかわる全国チーフ評議会を設けた。しかしトゥラガ・ネイションは、このチーフ評議会は結局西洋的な仕組みから逃れられていないと批判して、それに代わる先住民議会を提唱している。
- (2) この議論を展開してから20年が経過したが、福井は、その間の変化はカスタムとスクールの二分法が適用できないような状況を作り出したと論じている (Fukui 2020)。この点については、註16で再び取り上げる。
- (3) 確かに、カスタム概念の歴史の変遷を論じたり (Lindstrom 2008)、メラネシアという地域性とカスタムの関連を考えようとしたり (Lawson 2013)、文化の所有権の問題とからめてカスタムを論じようとする流れなどがあるが (Hviding 2007)、石森が指摘しているように、これらの論考は、筆者が批判してきた90年代のカスタム論の延長線上にある議論を展開しているにすぎない (石森 2016: 140-141)。
- (4) 筆者は2018年3月に開催されたオセアニア学会30周年記念シンポジウムで、「「辺境としてのオセアニア」を抜け出せるか」という発表を行ったが、その中で「エリー

- トの人類学」を提案している。本稿での議論を念頭に置いた発表であった。
- (5) ハフマンの記述によれば、セレモニーは演劇仕立てで行われたことがよく分かる。議長は、「おかずはどうした？」と言ったという。これはヴァヌアツの人々がよく言うセリフで、芋を中心にした石蒸し料理のときに、おかずとして鳥や豚などの肉が料理されるが、そのことを指している。
- (6) 首相と議長はともに北部ラガ出身者であり、彼らは同じ文化的背景をもっている。そのため、彼らに馴染みのあるボロロリと呼ばれる豚にまつわる儀礼の前半場面、「豚が走る」という場面がここで再現されたのである。ボロロリという儀礼は、北部ラガに存在する階梯制を具現する儀礼で、男たちはその儀礼の中で、豚を殺したり、豚を支払って記章を購入したりする。「豚が走る」というのは、ボロロリで必要な豚（殺したり支払いに用いる豚）の多くを男たちがボロロリの主人公に贈与する場面で、「豚が走る」と表現されるが、実際は男たちが儀礼場をダンスをしながらゆっくりと往来していく。そして、男たちが儀礼場を「走り」終えたあと、豚をもってくる。そのときに、与え手の中には豚を弓で射するという動作をする者もいる。これは、贈与した豚は殺すためのものである（記章の購入のために使用される豚ではない）ことを示している。矢として用いられる枝は豚に当たるだけで刺さらないし、豚も傷を負わないが、こうして贈与された豚は記章に支払いに用いることはできない（吉岡 1998:159-196）。
- (7) “The Best Piggy Bank”(http://www.journeyman.tv/film/5507). このフィルムは 2012 年に最初にオーストラリアで放映されている。
- (8) 経済危機とは、2007 年から 2010 年にかけて生じた世界金融危機、その後のヴァヌアツへの影響のことを指している。
- (9) ウィキペディアの「Livatu」に掲載されていた映像。ウィキペディアでは、紙幣の画像などは、通貨のイメージそのものについてのコメントや批評をするときにのみ、free use（著作権をもっている者の許可を得ることなく利用できる）として利用できるという立場をとっている。
- (10) 9月28日の間違いか？
- (11) “Bail for Vanuatu group jailed for wearing traditional garb.” Radio New Zealand の 2016 年 10 月 21 日の記事 (https://www.rnz.co.nz/international/pacific-news/316226/bail-for-vanuatu-group-jailed-for-wearing-traditional-garb)及び、“Vanuatu judge storms out after chief reappears in traditional garb.” Radio New Zealand の 2016 年 10 月 26 日の記事 (https://www.rnz.co.nz/international/pacific-news/316530/vanuatu-judge-storms-out-after-chief-reappears-in-traditional-garb)より。
- (12) アルジャジーラの記事“The chief fighting for an indigenous Vanuatu nation”. (https://www.aljazeera.com/indepth/features/2017/08/chief-fighting-indigenous-vanuatu-nation-170807120327055.html)より。
- (13) “Vanuatu judge storms out after chief reappears in traditional garb.” (Radio New Zealand

の記事。註 11 参照)。なお、ヴァヌアツの裁判所は下から、島裁判所(island court)、下級裁判所(magistrates court)、そして最高裁判所(supreme court)となっているが、さらにその上に上訴裁判所(court of appeal)がおかれている。ヴィラレオの裁判はすべて最高裁判所で行われている。

(14) 註 12 に同じ。

(15) 北部ラガでの調査は、1974 年、1981 年～1982 年、1985 年、1992 年、1996 年、1997 年、2013 年、2019 年に実施し、首都のポートヴィラでの調査は、北部ラガで調査を行った年すべてで島に行く前後に実施し、さらに 2003 年、2004 年、2011 年、2012 年、2014 年、2015 年にも実施してきた。エスピリトゥ・サント島の地方都市ルガンヴィルでの調査は、2003 年、2004 年、2012 年、2014 年、2018 年に行っている。

(16) 註 2 で指摘したように、福井は、アネイチウム島でここ 20 年の間に生じた変化を取り上げ、筆者が 20 年前に論じたカスタムとスクールが併存するバイカルチュラルな状況はもはや存在しないと論じている。そして福井は、筆者がかつて批判したリンドストロームやホワイトが展開した「文化的混淆」の議論を再評価し、観光産業が活性化し貨幣経済の流入が顕著な現在のアネイチウムでは、スクールの要素とカスタムの要素が混ざって「文化的混淆」の状態になっていると主張している (Fukui 2020)。確かに、ここ最近の 20 年間に於ける西洋近代の浸透度は高くかつ急速で、その結果、大きな変化がヴァヌアツを襲っている。したがって 20 年前に見出すことができたカスタムとスクールの併存状態は、今は崩れてしまっていると言うことはできる。ただし、筆者は、福井のように「文化的混淆」が生まれていると捉えるよりもむしろ、スクールがカスタムを侵食してカスタムが消滅しつつある状態と捉えるほうがいいように思う。そもそも、西洋の文化要素が人々の生活の中に侵入して混在するという現象は、ヴァヌアツが西洋世界と接触したその段階からすでに始まってきているのであり、カスタムと呼ばれるものは、西洋的なスクールの要素をすべて排除したところに成立したわけではない。北部ラガの例でいえば、腕時計をはめ、ゴム草履をはき、T シャツ姿で行うボロロリ儀礼であっても、やはり全体としてそれはカスタムの領域と考えられているのである。つまりは、カスタム概念では個々の文化要素に着目する要素主義的分析が通用するのではなく、西洋とは異なると人々が考える意味付けに着目する必要があるのである (吉岡 2000:155-156, 170)。しかも、筆者が 20 年以上前に指摘しておいたように (吉岡 1998:86)、バイカルチュラルな地域では結局スクールが強力になり、こうした意味でのカスタムでさえ衰退していくのである。「カスタムが弱い」と自認しているアネイチウムではなおさらそうした事態が進行することは十分に予測できることなのである。確かにアネイチウムでは、現金収入が増えたため畑に行き芋類を収穫してくるといった生活が減少し、商店で購入したコメを食べる生活へと変わってきているという現実があるかもしれない (Fukui 2020:102)。人々は、首都のポートヴィラと同じように現金がものをいう「楽ではない生活」が島に出現していると実感し

ているかもしれない。こうした状況は、しかし、福井の言うような「文化的混淆」であると言うよりもむしろ、筆者には、アネイチュムのポートヴィラ化の兆候であり、カスタムとスクールの併存状態からカスタムが極端に衰退しつつある状況と捉えるほうが実情にあっていると思える。現に人々は次のように言っているのである。つまり「現金は我々のカスタムをだめにする。島では我々のカスタムを守らねばならない。しかし観光と現金はそれをダメにする」(Fukui 2020:101)。また別の者は、若者が畑に行かず現金を使って生活していることについて、「ここはポートヴィラではない。ここはシドニーではない。我々は自分たちのカスタムを尊ばねばならない。しかし今日の我々のカスタムは本当のカスタムではない」と述べている(Fukui 2020:103)。福井はこの言説を、「島の生活はまだスクールではないがもはやカスタムでもない」(Fukui 2020:104)ので文化混淆の状態だと言いたいようであるが、「本当のカスタムではない」、あるいは「間違ったカスタム」という視点は、20年以上前のバイカルチュラルな状況が顕在していた北部ラガでも見出せたことであり、これを文化的混淆の証とするのはちょっと難しいと思われる(cf.吉岡 2000:167)。

- (17) “Pacific Concerns Resource Center: Resourceful Motarilavoa Hilda Lini.” Pacific Island Report の記事(<http://www.pireport.org/articles/2000/04/18/pacific-concerns-resource-center-resourceful-motarilavoa-hilda-lini>)、 “Heroes for a Better World” (<http://www.betterworld.net/heroes/lini.htm>)、 Pacific Life Community の “Motarilavoa Hilda Lini” の記事 (<https://pacificlifecommunity.wordpress.com/2009-retreat-information/motarilavoa-hilda-lini/>) 参照。
- (18) ヒルダー・リニは、女性だけの新しい政党レレオン・ヴァヌア民主党から、他の多くの女性候補者とともに 2020 年の総選挙に立候補する予定だったが(Vila Times 2019, Vanuatu Daily Post 2018b)、結局は出馬しなかった。というのは、同党の党首となったヒルダー・リニが、選挙の 1 か月前に、準備不足のため候補者を立てないことを決定したからだ。ただし、彼女は、2024 年の総選挙ではしっかり準備をして戦うと述べている(Vanuatu Daily Post 2020)。

引用文献

Fukui, E.

- 2020 “From Kastom to Developing Livelihood: Cruise Tourism and Social Change in Aneityum, Southern Vanuatu.” *People and Culture in Oceania* 35:85-108.

Huffman, K.

- 2005 *Traditional Money Banks in Vanuatu. Project Survey Report.* Vanuatu Cultural Council.
- 2007 “Evaluation Report: UNESCO/Japanese Funds-in-Trust for the Preservation and Promotion of the Intangible Cultural Heritage. Traditional Money Bank Project”.

UNEACO

Hviding, E.

- 2007 *Pacific Alternatives: Cultural Heritage and Political Innovation in Oceania.*
Proposal for International Collaborative Project. Univ. of Bergen.

石森大知

- 2016 「「カスタム論再考」からの再始動——メラネシアにおけるバイカルチュラルな世界の背景」白川千尋、石森大知、久保忠行編『多配列思考の人類学——差異と類似性を読み解く』風響社、pp.135-156.

Lawson, S.

- 2013 “Melanesia: The History and Politics of an Idea.” *The Journal of Pacific History* 48-1:1-22.

Lindstrom, L.

- 2008 “Melanesian Kastom and Its Transformations.” *Anthropological Forum* 18-2:161-178.

Lindstrom, L. and G. White

- 1994 “Cultural Policy: An Introduction.” In Lindstrom, L. and G. White (eds.) *Culture · Kastom · Tradition: Developing Cultural Policy in Melanesia.* Institute of Pacific Studies, Univ. of the South Pacific, pp.1-18.
- 1997 “Introduction: Chiefs Today.” In White, G. and L. Lindstrom eds. *Chiefs Today: Traditional Pacific Leadership and the Postcolonial State.* Stanford Univ. Press, pp.1-18.

Lini, W.

- 1980 *Beyond Pandemonium. From the New Hebrides to Vanuatu.* Asia Pacific Books.

Vanuatu Daily Post

- 2014a “Release of Paper Notes Specimen of Vanuatu Indigenous Currencies.”
9月18日号
- 2014b “Tuvatu is not recognized as legal tender.” 9月28日号
- 2014c “Chief Vireleo explains Tuvatu Currency.” 10月3日号
- 2016 “Where We Began and Where we Hope to Go.” 7月30日号
- 2018a “Court Rejects Chief’s Jurisdiction Submission.” 6月5日号
- 2018b “50% of Population not represented in Parliament: Lini.” 7月17日号
- 2018c “Judgement Date Set for Chief Viraleo.” 11月13日号
- 2019 “Chief’s appeal Dismissed.” 7月26日号
- 2020 “Leleon Vanua Democratic Party will not contest 2020 General Election.”
2月12日号

Vila Times

2019 “Hilda Lini to be candidate of Leleon Vanua Democratic Party in Port Vila.”

6月3日号

White, G.

1993 “Three Dimensions of Custom.” In White, G. and L. Lindstrom (eds.) *Custom Today*.
Anthropological Forum 6-4(special issue), pp.475-493.

1997 “The Discourse of Chiefs: Notes on Melanesian Society”. In White, G. and L.
Lindstrom (eds.) *Chiefs Today: Traditional Pacific Leadership and the Postcolonial
State*. Stanford Univ. Press, pp.229-252.

吉岡政徳

1998 『メラネシアの位階階梯社会——北部ラガにおける親族・交換・リーダーシ
ップ』風響社

2000 「カスタムとカスタム——オセアニアにおける伝統概念研究の批判的考察」
須藤健一編『オセアニアの国家統合と国民文化』JCAS 連携研究成果報告
2、pp.143-182.

2001 「カスタム論再考——文化の政治学を越えて」『民族学研究』66-2:178-183.

2005 『反・ポストコロニアル人類学—ポストコロニアルを生きるメラネシア』
風響社